

はしがき

21世紀の東南アジア政治を学ぶ

21世紀に入り、世界政治は大きな転換点を迎えている。その舞台の1つはアジアである。冷戦崩壊後のアメリカ一強の時代は終わりを迎え、権威主義的な中国が台頭している。アメリカと中国との対立が米中新冷戦と呼ばれることも多い。本書が扱う東南アジアという地域はそうした米中攻防の中心舞台である。アメリカは中国による領土拡張の野心も含めた影響力の行使を食い止めるためのパートナーを東南アジア諸国に求め、中国は太平洋やインド洋への入口となるこの地域でアメリカと対抗する友好国を増やそうと躍起である。

経済的にもこの地域は注目を集めている。世界経済にとって欧米日の存在感は低下し、アジア・アフリカの新興国の存在感が増している。東南アジアの多くの国は新興国である。この地域の経済成長は決して今に始まったものではなく、1970年代には一部で本格化していたが、当時は先進国にとって安く労働者を雇える生産現場であり、原材料の供給地であった。現在はそうではない。製造業は国境を越えてつながりながら高度化しているし、購買意欲の高い分厚い中間層がいる市場としての魅力が高まっており、それを目当てに多くの投資が舞い込んできている。

日本との関係はどうか。2012年以降の首相4人の最初の外遊先（国際会議を除く）はすべて東南アジアのどこかの国を含んでいる。日中の外交関係や安全保障環境が悪化するなかで、東南アジア諸国との友好関係はますます重要になっていることを示しているだろう。経済や社会の関係はいまやとても深い。皆さんのなかにも、シンガポールやタイ、ベトナムを観光で訪れたことのある人は多くいるだろうし、親が東南アジア出身の人（有名アイドルグループのメンバーを務めた人も！）、企業などで駐在する親とともに東南アジアに住んでいた人もいるはずだ。その一方で、日本で暮らす東南アジア出身者もこの10年で約3倍（約50万人から約150万人）に増えた。

では、皆さんは、どこまで東南アジアの政治や国際関係について知っているだろうか。あまり知らないという人が多いのではないだろうか。周囲に中国史

のマニアを見つけることは簡単なことだが、インドネシアの現大統領の名前を言える人はそうはいない。知識が乏しいのは、学校の教科書であまり取り上げられていないせいでもある。本書の目的は、皆さんに東南アジアの政治や国際関係を知ってもらうことである。ダイナミックに変容が始まった21世紀以降に着目し、そのダイナミズムを理解するうえで大事だと思えるテーマを取り上げている。経済成長を続け、若年層が多く、都市化やデジタル化が急速に進んでいて、日本以上にダイナミックに社会が変わる、その面白さを理解してもらいたい。

面白いといっても、よいことばかりではない。国内政治にも国際関係にも課題は多い。民主化は停滞している。経済格差は大きくなり、汚職も蔓延している。軍隊の政治関与が目立ち、内戦が続く国もある。森林破壊、大気汚染などの環境問題も深刻である。国際関係に目を向けると、この地域の国々は必ずしも結束しているわけではなく、地域機構である東南アジア諸国連合（ASEAN、アセアンと読む）の存在意義を疑問視する声もある。成長著しく将来が明るく見える国々の負の側面にも本書は光を当てよう。

東南アジアとは

東南アジアは大陸部と島嶼部に大きく分けることができる。大陸部東南アジアには、ミャンマー、タイ、ベトナム、ラオス、カンボジアの5カ国、島嶼部東南アジアには、インドネシア、マレーシア、シンガポール、ブルネイ、フィリピン、東ティモールの6カ国が含まれる。今でこそ、東南アジアは当たり前の地理的概念ではあるが、インドと中国の間にある地域を東南アジアと呼び始めたのは第二次世界大戦中のことである。連合軍が日本の侵攻に対抗するために、1943年にスリランカに東南アジア連合軍司令部を作ったときに始めて「東南アジア」という言葉が使われた。もっぱら軍事的・戦略的な用語だったのである。

第二次世界大戦後に冷戦が深刻化すると、学問として地域研究が主にアメリカに誕生した。東南アジア研究という分野も生まれ、現在の東南アジア諸国に関する政治学・経済学・歴史学・人類学的研究などが進んだ。日本の場合、第二次世界大戦前、帝国主義的な観点からこの地域を主に分析する南方研究が

あった。戦後はこの南方研究を下敷きにしつつアメリカの影響を受けた東南アジア研究が誕生した。こうしたことからすると、東南アジアという地域はこの地域の人々にとって意味があった地域（概念）ではなく、アメリカなど大国が作り上げたもの地域（概念）でしかないように思える。しかし、1967年にはタイ、インドネシア、フィリピン、マレーシア、シンガポールといった東南アジアの資本主義諸国が ASEAN という地域機構を作り上げ、冷戦が崩壊すると、1990年代にはベトナム、ラオスなど社会主義諸国や軍事政権であるミャンマーも参加していった。21世紀には、東ティモールを含む東南アジア諸国すべてが加盟する機構になった。東南アジア諸国が自ら東南アジアを実体化してきたのである。今では、東南アジアと ASEAN がほぼ同じ意味で使われることも増えている。

本書の構成と内容

本書は、大学で東南アジア政治を初めて学ぶ学部生を対象としている。執筆者は皆、この地域の政治の専門家であり、内容としては東南アジアの政治、経済、社会に関心のある一般の読者や研究者にも読んでもらえるものにした。東南アジアの政治については、これまでも優れた教科書が書かれてきた。各国政治を取り上げたものもあれば、テーマ別に章構成を取っているものもある。そうした教科書と本書が違うのは、21世紀に入ってからこの地域の政治を 이슈別に取り上げた点である。1カ国ずつ取り上げると、それぞれの国の政治的特徴はよく分かるものの、読者が東南アジア政治の全体の特徴を理解するのが難しくなってしまう。東南アジア諸国の国内政治や国際関係を考えたときに共通して重要なテーマを取り上げたほうが学べることが多いと考えたからである。とりわけ、1997年のアジア通貨危機以後の東南アジアは、政治体制は多様でありながらも類似性も多いので、テーマ別に取り上げても例外的な国というのがある。このことは本書を読んでもらうとよく分かる。

本書は4部13章構成である。第Ⅰ部が21世紀以前の東南アジア政治の概論である。第1章が独立までの時代を扱い、第2章が独立後から20世紀末までの時代を取り上げる。どちらの章も、第Ⅱ部から第Ⅳ部で扱うテーマを意識して書くことで、21世紀の東南アジア政治をより良く理解できるようにしている。第

Ⅱ部は東南アジア政治のうち、国家に関わるテーマを解説している。第Ⅱ部の最初の章である第3章は東南アジアでみられる政治体制のダイナミズムを分析している。第4章は経済成長に果たす国家の役割を論じ、第5章は蔓延する汚職問題に切り込んでいる。第6章は軍が国防以外に果たす役割を論じている。

第Ⅲ部は、社会や生態に関わるテーマを取り上げている。第7章はジェンダーをめぐる政治を分析している。第8章は未だに続く民族・宗教紛争の背景と分析の視点を示している。第9章は森林破壊などの環境悪化を生み出す政治の特徴と対策を明らかにしている。第10章は急速に進むデジタル化と民主化との関係を論じている。

第Ⅳ部は東南アジアを取り巻く国際政治を扱っている。第11章ではこの地域で最も重要な地域機構である ASEAN の変容を取り上げている。第12章では、21世紀に入ってから東南アジアと日本の変化の特徴を明らかにしている。第13章は中小国からなる東南アジア域内の国際政治を論じている。

本書の読み方は自由である。21世紀以前の時代の政治を取り上げた第Ⅰ部を読んでから、第Ⅱ部から第Ⅳ部で関心のある章を読むと理解がより進むかもしれないが、第Ⅰ部を飛ばして第Ⅱ部以降の章を読んでも内容が理解できるものとなっている。相互に関連している章についてはクロスレファレンスを付け、各章の終わりには、それぞれの章が取り上げたテーマをより理解するための文献案内をつけた。また、本文では十分に扱えなかったけれども、21世紀の東南アジア政治を理解するうえで重要なテーマについてはコラムで取り上げた。日本にとってますます重要になる21世紀東南アジアの政治のダイナミズムを理解するうえで本書が役に立つことを願っているし、本書がこの地域への関心を高め、旅行し、現地の人々と交流する窓口になることを期待している。

この本は、企画段階から法律文化社の八木達也さんと一緒に作り上げてきた。トロトロしている編者たちにときおり活を入れてくれた。それがなければ、もっと出版が遅れたかもしれない。八木さんには、心より感謝申し上げたい。

2025年6月

編者一同